

イザベラ・バードと山形観光

木村 百合花

1878（明治 11）年に日本の生活文化の記録のために日本を訪れた、19 世紀の女性イギリス人作家イザベラ・バード（Isabella Lucy Bird, イザベラ・ルーシー・バード）は、その記録として 1885（明治 18）年に『日本奥地紀行』を出版した。本著の中で、山形県の米沢平野について、バードは、「アジアのアルカディア」、「エデンの園」と絶賛した。

本論文の目的は、バードの『日本奥地紀行』という紀行文学を観光資源として利活用している例や、それを基にした施策や取り組みについて調査し、県内旅行、マイクロツーリズムと結びつけ、ウィズコロナの時代となるこれからの山形県の観光について考察することである。そのために、『日本奥地紀行』でバードが訪れた市町村を中心にした山形県の置賜、村山、最上地域を研究対象地域に設定し、バードに関係のある施設や記念碑の分布や実際のバードの各市町村に対する感想をそれぞれ表にまとめ、分析した。主な調査方法としては、文献による調査と Google マップを用いた分布状況の把握、そして実際に現地における実地調査を行った。

その結果、「アルカディア」という名称を使用した施策や施設設置などがピークだった 1980 年代のみならず、近年もバードに関係する名称や内容の史跡やまちおこしのような取り組みが行われ始めており、今もなお観光資源として注目されていることがわかった。また、県内の観光は県民が支えているというデータに基づいて、コロナ禍を機に、インバウンド効果を見込んだものではなく、マイクロツーリズムによる地元の魅力の再発見を目的とした近場の観光の形態に移行していくことが必要になっていくと考察した。